

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	マラルメの Poe 翻訳(1)
Sub Title	La traduction de Poe par Mallarmé (1)
Author	原山, 重信(Harayama, Shigenobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.57 (2013. 10) ,p.33- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20131031-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マラルメのポー翻訳（1）¹⁾

原 山 重 信

0. マラルメと英語

マラルメを読むことの魅力とは何であろうか？ 例えば、ロバード・ブラウニングの詩「ボーフィリアの恋人²⁾」に倣うなら、自分が補足し得た女はもう殺してしまいたい、つまり捨ててしまいたいと思うのが、男の深層心理に潜む謂わば男の性^{きが}だとするなら、マラルメは何度読んでも納得がいかない部分が何かしら残り、汲めども尽きないという点にあるのではなかろうか。

したがって、マラルメを問題にする際、このわかりにくい書き方を不問に付すことはできない。マラルメがなぜこのようにわかりにくい書き方をするのかという問題に関しては、そのすべてを合理的に説明するたった一つの鍵があるわけではないが、その一部、もっと正確に言えば、その始まりをおぼろげながら示すことは可能のではないか。マラルメを読むに当たって、誰もが味わう困難、これはどこから來るのか？ この問い合わせかかりとも解明の糸口を与える、もしくはその一部にアプローチしようというのが本論の意図するところである。

その手続きを始めるに当たって、マラルメが英語教師であったという事実は、無視することができない。マラルメの人生の半分を占める英語教師としてのキャリアが、詩人としての活動にどう影響したか、を全く等閑視することは片手落ちと言うべきであろう。たとえ、彼が無能な教師で、英語ができなかったという評価が一般的であったとしても、30年もの年月を彼はこの職業に費やしたのだ。そして、その間、かなりの時間をこの職業のために割いたはずなのだ。

マラルメは、例えばジャック・シェレルが言うように、英語力が乏しくて、英語が彼の中に十分浸透するというレベルではなかった³⁾と認められるにせよ、英語教師を生業とし、日々教室で英語を教えていたキャリアが、全く創作に影響を与えなかつたという考えも容易に肯づることができない。

私が問題にしたいのは、マラルメの英語力ではない。英語ができなかつたから英語に影響されなかつたのだという判断は全く適切ではないからだ。逆に、できなかつたからこそ、そこに誤訳が生まれ、これがマラルメのフランス語のわかりにくさを形成することにいささかなりとも寄与したのだと考えたい。

英語を母国語のようにあやつるバイリンガルのような人ではないからこそ、英語を丁寧に翻訳して、そこからたどたどしく、英語的な要素を自らのテクストの中に忍ばせていったというのが実態なのではなかろうか。ここには翻訳というものがもつ本質が表れているように思われる。つまり、英語という比較の項をもつことで、自身のフランス語が相対化され、伝統に則った模範的な文体をつくる代わりに、もっと異質な要素を取り入れようという遊び心というか、あまのじゃく的な精神が生まれたとも考えられるのだ。

ともあれ、マラルメは英語教師という職業を選ぶわけだが、それ以前から読んでいたポーの翻訳に手を染める。これがマラルメ的な文体をつくるきっかけの第一歩だったと考えたい。

彼が翻訳したのはポーの韻文詩である。これを散文に訳することで、韻文でなくても「詩」が書けるのだというテーゼを彼は自分で確立していったものと思われる。「哀れで神聖な我らのボードレールが終わったところから始めるとは、私には全く恐ろしい気がします⁴⁾」と、ボードレールが没した1867年8月から約1箇月後にヴィリエ・ド・リラダンに宛てた書簡の中で、マラルメはこれから待ち受ける創作活動の困難さを予感して述べている。この時期マラルメは、いろんな雑誌に投稿を試みながら実現しなかつた、ポーの詩の翻訳を手掛けていた点から考えても、ここで問題になつてゐるのは單に『悪の華』の詩人としてのボードレールだけではなく、ポーの翻訳者としてのボードレールとも考えられる。つまりここでは、独自の詩風をどう確立

していくか、という最も肝心な点だけではなく、ポーの翻訳を世に出すに当たって、ボードレールとの違いをどこで出していくかということも同時に問題になっていたのではないか。マラルメが専ら韻文詩の翻訳を手掛けたのは、短編及び詩論は既にボードレールによって完璧にフランス語に移されているという認識があったからであろうと思われる。自らの訳業は、これを補完するものとして位置づけていたのだろう。

実際、ボードレールが訳した韻文詩は、『異常な物語 *Histoires extraordinaire*s』の冒頭に置かれた「我が母に」(À ma mère)、短編「リジア Ligeia」に組み込まれた「勝ち誇る蛆」(Le Ver Conquérant)、「アッシャー家の崩壊 La Chute de la maison」中の「幽靈宮殿」(Le Palais hanté)、それに「構成の哲理」(The Philosophy of composition, ボードレール訳では Genèse d'un poème) がその創作の過程を語る「大鴉」(Le Corbeau) の4編にとどまる⁵⁾。これらの中で唯一、韻文詩を独立して訳して世に問うたものは、1853年3月1日の『芸術家 L'Artiste』誌に発表された「大鴉」だけであった。彼自身、1864年の「翻訳者の意見 Avis du traducteur」と称する短文のなかで次のように述べている。

もし私の仕事がフランスのような国で実りあるものとして続けられるとしたら、私には詩人エドガー・ポーと文芸評論家エドガー・ポーを示すことが残っているだろう。眞の詩の愛好家なら誰でも、この二つの務めのうち最初のものは果たすのが殆ど不可能であり、私の翻訳者としての極めて慎ましく、極めて献身的な能力をもってしては、リズムと脚韻を欠いた逸楽を埋め合わせることができないことをおわかりいただけるだろう⁶⁾。

マラルメがこれを読んだという確証はないが、まさにこの言葉をそのまま文字通りに受け取り、先輩詩人が行った短編と評論の翻訳を繰り返すことなく、韻文詩の翻訳に敢えて挑んだのである。ボードレールがここで言うリズムと脚韻を思い切って捨象し、逐語訳に徹したのだ。彼の翻訳はこのポーの

詩に始まって、『英単語』『古代の神々』、そして『インド説話集』といった教科書類に至るまで、自ら « calque » (透き写し) と呼ぶ手法に貫かれていく。

マラルメは、10代の頃、『落穂集 *Glanes*』と名付けられたノートにポーの韻文詩の逐語訳を載せて以来、1888年に単行本の『ポー詩集』を出版するまで、その翻訳に断続的に関わった。それぞれの時代において、だんだん進化を遂げていったようだが、恐らくリセの教室でも取り上げられたことがあったのではないだろうか。このように、彼が親しんだのは、普通の模範的なリセの教師が教えるべき英語ではなかったようだ。それは視学官 (inspecteur) の数々の証言が残されている⁷⁾から、マラルメ研究者は固より、マラルメの伝記や基本的な研究書に目を通した経験のある者なら誰でもわかるはずである。

さらに、上記のような、80年代以降、教科書として出版されたり、或いは生前活字にはならなかったものの、没後発見された英語関係の著作は、彼が教室で行っていた授業そのものではないにせよ、これを色濃く反映しているものであることは疑いの余地がない。何故なら、あまつさえ体力的にも弱くて、教師の仕事のために詩を書く時間が足りなかったマラルメに、授業で行ったこととは全く別のものを、さらに著述するほどの肉体的、精神的エネルギーがあったとは考えられないからである。

だとすれば、そこに当然、マラルメの裏の本業たる詩作へ、英語が反映されていないなどと考えることのほうが不自然だということが了解されよう。

ここではまず手始めに、ポーの翻訳をめぐる問題に焦点を当てて見ていくたい。

1. ポー翻訳の経緯、特徴

マラルメは、ポーの詩のどういう点に惹かれたのだろうか？

マラルメは、少年の頃、イギリスの家庭と付き合いがあり、その家の少女に憧れるなどして、さらに当時、時代の最先端を誇っていたイギリスという

国そのものにも興味をもったと推定される。それが英語学習への興味の第一歩であったろう。

また、幼くして母を亡くし、さらに妹も相次いで失ったことで、代々の家業であった平平凡凡たる官吏への道へとあっさり進むという安直な進路選択への疑問が湧いてきたのだろう。そこで、ロマン主義の文学に触れ、ヴィクトル・ユゴーを読んでその圧倒的な影響の下に詩を書き、バンヴィルを手本としてその巧みな作詩法を攝取し、ゴーチエ、ボードレールと読み進むなかで、恐らく、その翻訳者たるボードレールを通じてポーに出会うことになったのだろう。これは、当時の文学青年にはよくあったことで、何もここにマラルメの独自性があったわけではない。しかし、それからが違う。

ポーの詩には、喪のテーマが多く、母、妹を相次いで亡くして、詩人という道を選んだ青年期のマラルメの機微に触れるところがあったものと思われる。ポーの詩に出てくる *Lenore*, *Helene*, *Ulalume*, *Annabel Lee* といった死んだ女は、マラルメ自身の死んだ妹マリアを想起させる。

マラルメのポー翻訳は以下の経緯を辿る。

①少年期から、フランスの先輩詩人たちと共に、ポーにも関心をもち、『落穂集 *Glanes*』に直訳を載せている。ここに載せたのは、以下の詩である。

1. 「ヘレナに À Hélène」 2. 「ユラリューム Ulalume」 3. 「天国の ある人に À quelqu'un qui est dans le paradis」 4. 「アナベル・リー Annabel Lee」 5. 「ユーラリー Eulaly [sic]⁸⁾」 6. 「円形闘技場 Le Colisée」（断章） 7. 「大鴉 Le Corbeau」 8. 「レオノア Lénore」 の 8 編と、「鐘のうた Les Cloches」 がこれらとは別に「鐘」のテーマでまとめられた中に置かれている。

②次に、恐らく 62 年頃から、今度は出版する目的で、本格的に翻訳に着手し、60 年代を通じて何回か雑誌発表の機会を探るが、実現しない。

③70 年代に至って、2 度、都合 15 篇の翻訳が雑誌に発表される。

④88 年、89 年と立て続けに、それまでに雑誌発表してきた 20 篇の詩に「註釈 Scolies」を書き、さらに新訳を加えて、単行本『エドガー・ポー詩集』に、都合 36 篇の翻訳を発表。

マボットの全集に収録されたポーの詩は、私の数え間違いでなければ 101 篇あるから、マラルメはその約 3 分の 1 を翻訳したことになる。

2. 語彙面での影響関係

パリ上京以前のマラルメは、ポー翻訳の成果を、主として韻文詩に適用させようと努めたよう見える。それは、繰り返しの積極的な導入や、語彙の借用に表れている。

ポーの構成の詩学を最も反映させて書かれた詩篇として 1863 年に書かれたと推定されている「窓」、「青空」などが既に指摘されており、「海の微風」の書き換えに殊更繰り返しが用いられていることもシェレルなどによって指摘されている⁹⁾ので、ここでは別の詩篇を取り上げる。それは、破棄された詩篇「エロディアード古序曲 Ouverture ancienne d'Hérodiade」である。

この繰り返しの詩学の実践の最たるもののが、「古序曲」、「イジテュール」である。前者は、あまり従来の注釈者も触れていないが、テーマ、語彙においてかなり多くのポーからの借用が見られる。

まず、テクストを掲げる。

OUVERTURE D'HÉRODIADE

OUVERTURE ANCIENNE

État corrigé puis abandonné, 1866–1898

LA NOURRICE

(Incantation)

Abolie, et son aile affreuse dans les larmes

Du bassin, aboli, qui mire les alarmes,

De l'or nu fustigeant l'espace cramoisi,
 Une Aurore a, plumage héréditaire, choisi
 Notre tour cinéraire et sacrificatrice, 5
 Lourde tombe qu'a fuie un bel oiseau, caprice
 Solitaire d'aurore au vain plumage noir...
 Ah! des pays déchus et triste le manoir!
 Pas de clapotement! L'eau morne se résigne,
 Que ne visite plus la plumage ni le cygne 10
 Inoubliable : l'eau reflète l'abandon
 De l'automne éteignant en elle son brandon :
 Du cygne quand parmi le pâle mausolé
 Ou la plume plongea la tête, désolée
 Par le diamant pur de quelque étoile, mais 15
 Antérieure, qui ne scintilla jamais.

Crime! bûcher! aurore ancienne! supplice!
Pourpre d'un ciel! Etang de la pourpre complice!
Et sur les incarnats, grand ouvert, ce vitrail.

La chambre, singulière en un cadre, attirail 20
 De siècles belliqueux, orfèvrerie éteinte,
 A le neigeux jadis pour ancienne teinte,
 Et la tapisserie, au lustre nacré, plis
 Inutiles avec les yeux ensevelis
 De sibylles, offrant leur ongle vieil aux Mages. 25
 Une d'elles, avec un passé de rameaux
 Sur sa robe blanchie en l'ivoire fermé
 Au ciel d'oiseaux parmi l'argent noir parsemé,
 Semble, de vols partis costumée et fantôme,

Un arôme qui porte, ô roses! un arôme 30
 Loin du lit vide qu'un cierge soufflé cachait,
 Un arôme d'os froids rôdant sur le sachet,
 Une touffe de fleurs parjures à la lune,
 (À la cire expirée, encor s'effeuille l'une,) 35
 De qui le long regret et les tiges de qui
 Trempent en unseul verre à l'éclat alanguï...
 Une Aurore traînait ses ailes dans les larmes!

Ombre magicienne aux symboliques charmes!
 Cette voix, du passé longue évocation,
 Est-ce la mienne prête à l'incantation? 40
 Encore dans les plis jaunes de la pensée
Traînant, antique, ainsi qu'une toile encensée
 Sur un confus amas d'encensoirs refroidis,
 Par les trous anciens et par les plis roidis
 Percés selon le rythme et les dentelles pures 45
 Du suaire laissant par ses belles guipures
 Désespéré monter le vieil éclat voilé
 S'élève, (ô quel lointain en ces appels celé!)
Le vieil éclat voilé du vermeil insolite,
 De la voix languissant, nulle, sans acolyte, 50
 Jettera-t-il son or par dernières splendeurs,
 Elle, encore, l'antienne aux versets demandeurs,
 À l'heure d'agonie et de luttes funèbres!
 Et, force du silence et des noires ténèbres,
 Tout rentre également en l'ancien passé, 55
 Fatidique, vaincu, monotone, laissé,
 Comme l'eau des bassins anciens se résigne.

*Elle a chanté, parfois incohérente, signe
Lamentable!*

le lit aux pages de vélin,	60
Tel, inutile et si claustral, n'est pas le lin!	
Qui des rêves par plis n'a plus le cher grimoire,	
Ni le dais sépulcral à la déserte moire,	
Le parfum des cheveux endormis. L'avait-il?	
Froide enfant, de garder en son plaisir subtil	65
Au matin grelottant de fleurs, ses promenades,	
Et quand le soir méchant a coupé les grenades!	
Le croissant, oui le seul est au <u>cadran</u> de fer	
De l'horloge, pour poids suspendant Lucifer,	
Toujours blesse, toujours une nouvelle heuree,	70
Par la clepsydre à la goutte obscure pleurée,	
Que, délaissée, elle erre, et, sur son ombre, pas	
Un ange accompagnant son indicible pas!	
Il ne sait pas cela, le roi qui salarye	
Depuis longtemps la gorge ancienne et tarie.	75
Son père ne sait pas cela, ni le glacier	
Farouche reflétant de ses armes l'acier,	
Quand, sur un tas gisant de cadavres sans coffre	
Odorant de résine, énigmatique, il offre	
Ses trompettes d'argent obscur aux vieux sapins!	
Reviendra-t-il un jour des pays cisalpins!	80
Assez tôt? car tout est presage et mauvais rêve!	
À l'ongle qui parmi le vitrage s'élève	
Selon le souvenir des trompettes, le vieux	
Ciel brûle, et change un doigt en un cierge envieux.	
Et bientôt sa rougeur de triste crépuscule	85

Pénétrera du corps la cire qui recule!
 De crépuscule, non, mais de rouge lever,
Lever du jour dernier qui vient tout achever,
 Si triste se débat, que l'on ne sait plus l'heure
La rougeur de ce temps prophétique qui pleure 90
Sur l'enfant, exilée en son cœur précieux
Comme un cygne cachant en sa plume ses yeux,
Comme les mit le vieux cygne en sa plume, allée
De la plume détresse, en l'éternelle allée
De ses espoirs, pour voir les diamants élus 95
D'une étoile, mourante, et qui ne brille plus!

*Et...*¹⁰⁾

この詩の冒頭は、ポーの詩「幽靈宮殿 The Haunted Palace」に似たおどろおどろしさに満ちている。参考までに、英語原文をはじめに、次にマラルメによる仮訳を掲げておく。

THE HAUNTED PALACE

In the greenest of our valleys
 By good angels tenanted,
 Once a fair and stately palace —
 Radiant palace — reared its head.
 In the monarch Thought's dominion —
 It stood there!
 Never seraph spread a pinion
 Over fabric half so fair!

Le Palais Hanté

Dans la plus verte de nos vallées par
 de bons anges occupée, jadis un beau
 palais majestueux, rayonnant palais !
 dressait le front. — Dans les domaines
 du monarque Pensée — c'était là, son site :
 jamais Séraphin ne déploya de plumes
 sur une construction à moitié aussi belle.
 //
 //

Banners yellow, glorious, golden,
 On its roof did float and flow,
 (This — all this — was in the olden
 Time long ago,)
 And every gentle air that dallied,
 In that sweet day,
 Along the ramparts plumed and pallid,
 A wingéd odour went away.

Wanderers in that happy valley,
 Through two luminous windows, saw
 Spirits moving musically,
 To a lute's well-tunéd law,
 Round about a throne where, sitting
 (Porphyrogenet!)
 In state his glory well befitting,
 The ruler of the realm was seen.

And all with pearl and ruby glowing
 Was the fair palace door,
 Through which came flowing, flowing, flowing,
 And sparkling evermore,
 A troop of Echoes, whose sweet duty
 Was but to sing,
 In voices of surpassing beauty,
 The wit and wisdom of their king.

Les bannières, claires, glorieuses,
 d'or, sur son toit, se versaient et flottaient
 (ceci — tout ceci — dans un vieux temps
 d'autrefois) ; et, tout vent aimable qui
 badinait dans la douce journée le long
 des remparts empanachés et blanchissants :
 ailée, une odeur s'en venait.

//
 //

Les étrangers à cette heureuse vallée,
 à travers deux fenêtres lumineuses,
 regardaient des esprits musi-calement se
 mouvoir, aux lois d'un luth bien accordé,
 tout autour d'un trône : où siégeant
 (Porphyrogénète !) dans un apparat à sa
 gloire adapté, le maître du royaume se
 voyait.

//
 //

Et tout de perle et de rubis éclatante
 était la porte du beau palais, à travers
 laquelle venait par flots, par flots, par
 flots et étincelant toujours, une troupe
 d'Echoes dont le doux devoir n'était que
 de chanter, avec des voix d'une beauté
 insurpassable, l'esprit et la sagesse de
 leur roi.

//
 //

But evil things, in robes of sorrow,
 Assailed the monarch's high estate.
 (Ah, let us mourn! — for never sorrow
 [[morrow]]
 Shall dawn upon him desolate!)
 And round about his home the glory
 That blushed and bloomed,
 Is but a dim-remembered story
 Of the old time entombed.

And travellers, now, within that valley,
 Through the red-litten windows see
 Vast forms, that move fantastically
 To a discordant melody,
 While, like a ghastly rapid river,
 Through the pale door
 A hideous throng rush out forever
 And laugh — but smile no more¹¹⁾.

Mais des êtres de malheur aux robes chagrines assaillirent la haute condition du monarque (ah ! notre deuil : car jamais lendemain ne fera luire d'aube sur ce désolé !) et, tout autour de sa maison, la gloire qui s'empourprait et fleurissait n'est qu'une histoire obscu-rément rappelée des vieux temps ensevelis.

//

//

Et les voyageurs, maintenant, dans la vallée, voient par les rougeâtres fenêtres de vastes formes qui s'agitent, fantastiquement, sur une mélodie discordante, tandis qu'à travers la porte, pâle, une hideuse foule se rue à tout jamais, qui rit — mais ne sourit plus¹²⁾.

次に、「古序曲」はとりわけ「ユラリューム」から多くの語彙を借りているように思われる。下線部を参照のこと。真ん中で反転する書き方は、「ためいき Soupir」と「古序曲」で用いられる。二重下線部を比べてみれば、歴然である¹³⁾。

Soupir

Mon âme vers ton front où rêve, ô calme sœur,
 Un automne jonché de taches de rousseur,
 Et vers le ciel errant de ton œil angélique,

Monte, comme dans un jardin mélancolique,
 Fidèle, un blanc jet d'eau soupire vers l'Azur! 5
 -- Vers l'Azur attendri d'octobre pâle et pur
 Qui mire aux grands bassins sa langueur infinie,
 Et laisse, sur l'eau morte où la fauve agonie
 Des feuilles erre au vent et creuse un froid sillon,
 Se traîner le soleil jaune d'un long rayon¹⁴⁾. 10

前述のように「イジテュール」における繰り返しもかなり顕著であり、この作品を、繰り返しの詩学の頂点にして、且つ最後の作品とみなすことができるだろう。

ここには、ポーの最もラディカルな繰り返しの詩「鐘のうた」の影響も見てとれる。

The Bells

Les Cloches

I

Hear the sledges with the bells —
 Silver bells!

What a world of merriment their melody foretells!

How they tinkle, tinkle, tinkle,
 In the icy air of night!
 While the stars that oversprinkle
 All the Heavens, seem to twinkle
 With a crystalline delight;
 Keeping time, time, time,
 In a sort of Runic rhyme,

To the tintinnabulation that so musically wells

Entendez les traîneaux à cloches —
 cloches d'argent ! Quel monde
 d'amusement annonce leur mélodie !
 Comme elle tinte, tinte, tinte, dans le
 glacial air de nuit ! tandis que les astres
 qui étincellent sur tout le ciel semblent
 cligner, avec cristalline délice, de l'œil :
 allant, elle, d'accord (d'accord,
 d'accord) en une sorte de rythme
 runique, avec la « tintinnabulation »
 qui surgit si musicalement des cloches

From the bells, bells, bells, bells,
 Bells, bells, bells —
 From the jingling and the tinkling of the bells.

//

II

Hear the mellow wedding bells —
 Golden bells!

What a world of happiness their harmony foretells!
 Through the balmy air of night
 How they ring out their delight! —
 From the molten-golden notes,
 And all in tune,
 What a liquid ditty floats
 To the turtle-dove that listens, while she gloats
 On the moon!
 Oh, from out the sounding cells,
What a gush of euphony voluminously wells!
 How it swells!
 How it dwells
 On the future! — how it tells
 Of the rapture that impels
 To the swinging and the ringing
 Of the bells, bells, bells —
 Of the bells, bells, bells, bells,
 Bells, bells, bells —
 To the rhyming and the chiming of the bells!

(des cloches, cloches, cloches, cloches,
 cloches, cloches) : du cliquetis et du
 tintement des cloches.

//

Entendez les mûres cloches
 nuptiales, cloches d'or ! Quel monde
 de bonheur annonce leur harmonie ! à
 travers l'air de nuit embaumé, comme
 elles sonnent partout leur délice ! Hors
 des notes d'or fondues, toutes ensemble,
 quelle liquide chanson flotte pour la
 tourte- relle, qui écoute tandis qu'elle
 couve de son amour la lune ! Oh ! des
 sonores cellules quel jaillissement
 d'euphonie sourd volumineusement !
 qu'il s'enfle, qu'il demeure parmi le
 Futur ! qu'il dit le ravissement qui
 porte au branle et à la sonnerie des
 cloches (cloches, cloches — des
 cloches, cloches, cloches, cloches), au
 rythme et au carillon des cloches !

//

Hear the loud alarum bells —
 Brazen bells!

What a tale of terror, now, their turbulency tells!
 In the startled ear of Night
 How they scream out their affright!
 Too much horrified to speak,
 They can only shriek, shriek,
 Out of tune,

In a clamorous appealing to the mercy of the fire,
 In a mad expostulation with the deaf and frantic fire
 Leaping higher, higher, higher,
 With a desperate desire,
 And a resolute endeavour
 Now — now to sit, or never,
 By the side of the pale-faced moon.
 Oh, the bells, bells, bells!
 What a tale their terror tells
 Of despair!

How they clang, and clash, and roar!
 What a horror they outpour
 On the bosom of the palpitating air!
 Yet the ear, it fully knows,
 By the twanging
 And the clanging,
 How the danger ebbs and flows;
 Yes, the ear distinctly tells,
 In the jangling
 And the wrangling,
 How the danger sinks and swells,

Entendez les bruyantes cloches
 d'alarme — cloches de bronze !
 Quelle histoire de terreur dit
 maintenant leur turbulence ! Dans
 l'oreille saisie de la nuit comme elles
 crient leur effroi ! Trop terrifiées pour
 parler, elles peuvent seulement s'écrier
 hors de ton, dans une clamour d'appel
 à merci du feu, dans une remontrance
 au feu sourd et frénétique bondissant
 plus haut (plus haut, plus haut), avec
 un désespéré désir ou une recherche
 résolue, maintenant, de maintenant
 siéger, ou jamais, aux côtés de la lune
 à la face pâle. Oh ! les cloches
 (cloches, cloches), quelle histoire dit
 leur terreur — de Désespoir ! Qu'elles
 frappent et choquent, et rugissent !
 Quelle horreur elles versent sur le sein
 de l'air palpitant ! encore l'ouïe sait-
 elle, pleinement, par le tintouin et le
 vacarme, comment tourbillonne et
 s'épanche le danger ; encore l'ouïe dit-
 elle, distinctement, dans le vacarme et
 la querelle, comment s'abat ou s'enfle
 le danger, à l'abattement ou à l'enflure
 dans la colère des cloches, dans la
 clamour et l'éclat des cloches !

//

By the sinking or the swelling in the anger of the //

 bells —

 Of the bells —

 Of the bells, bells, bells, bells,

 Bells, bells, bells —

In the clamor and the clangor of the bells!

IV

Hear the tolling of the bells —

 Iron bells!

*What a world of solemn thought their monody
 compels!*

 In the silence of the night,

 How we shiver with affright

At the melancholy menace of their tone!

 For every sound that floats

 From the rust within their throats

 Is a groan.

And the people — ah, the people —

 They that dwell up in the steeple,

 All alone,

And who, tolling, tolling, tolling,

 In that muffled monotone,

 Feel a glory in so rolling

On the human heart a stone —

They are neither man nor woman —

They are neither brute nor human —

 They are Ghouls: —

Entendez le glas des cloches —
cloches de fer ! Quel monde de pensée
solennelle comporte leur monodie !
Dans le silence de la nuit que nous
frémissons de l'effroi ! à la
mélancolique menace de leur ton. Car
chaque son qui flotte, hors la rouille en
leur gorge — est un gémissement. Et le
peuple — le peuple — ceux qui
demeurent haut dans le clocher, tous
seuls, qui sonnent (sonnant, sonnant)
dans cette monotonie voilée, sent une
gloire à ainsi rouler sur le cœur humain
une pierre — ils ne sont ni homme ni
femme — ils ne sont ni brute ni
humain — ils sont des Goules : et leur
roi, ce l'est, qui sonne ; et il roule,
(roule — roule) roule un Péan hors
des cloches ! Et son sein content se
gonfle de ce Péan des cloches ! et il

And their king it is who tolls: —

And he rolls, rolls, rolls,

Rolls

A Pæan from the bells!

And his merry bosom swells

With the Pæan of the bells!

And he dances and he yells;

Keeping time, time, time,

In a sort of Runic rhyme,

To the Pæan of the bells —

Of the bells: —

Keeping time, time, time,

In a sort of Runic rhyme,

To the throbbing of the bells —

Of the bells, bells, bells —

To the sobbing of the bells: —

Keeping time, time, time,

As he knells, knells, knells,

In a happy Runic rhyme,

To the rolling of the bells —

Of the bells, bells, bells: —

To the tolling of the bells —

Of the bells, bells, bells, bells,

Bells, bells, bells —

To the moaning and the groaning of the bells¹⁵⁾.

danse, et il danse, et il hurle : allant d'accord (d'accord, d'accord) en une sorte de rythme runique, avec le tressaut des cloches — (des cloches, cloches, cloches) avec le sanglot des cloches ; allant d'accord (d'accord, d'accord) dans le glas (le glas, le glas) en un heureux rythme runique, avec le roulis des cloches — (des cloches, cloches, cloches), avec la sonnerie des cloches — (des cloches, cloches, cloches, cloches — cloches, cloches, cloches) — le geignement et le gémississement des cloches¹⁶⁾.

ところがマラルメは、いわゆる「精神的危機」を脱して上京した70年代初頭には、この詩学からきっぱり足を洗っていた。あの「危機」を告げる有名な手紙の文言は、ポーの「アニーのためにFor Annie」の冒頭の明らかな

借用であるのも示唆的である。

Thank Heaven, the Crisis

Is over at last!¹⁷⁾

FOR ANNIE

Thank Heaven! the crisis —

The danger is past,

And the lingering illness

Is over at last —¹⁸⁾

しかしながら書簡集には、これを示す註が付いていない。日本語訳も同様である。このように、ポーの詩は、マラルメ研究者、とりわけ日本の研究者によって、原文で読まることは少なかったのではないだろうか。ステンメッツの伝記では「ポーに倣って¹⁹⁾」と書いてあるので、ステンメッツはわかっていたのだろうが、翻訳にはそういう註はやはり付いていない²⁰⁾。マルシャル編集の書簡集になって初めて、この情報は付け加えられているが、ポーを原文で読めば、もっと早く皆がこれに気が付いていたはずである。

しかし詩人は、ポーの翻訳と縁を切ったのではなかった。確かに繰り返しを用いた韻文詩は書かれなくなったが、今度は、この成果を主として散文に生かし始めたのである。マラルメの散文作品に、ポーの韻文詩を散文に翻訳した作業が反映されていくことになる。

ポーの詩は、謂わば Vers libre（自由詩）のようなもので、マラルメはこれを韻文に生かそうとして断念し、ここで獲得された自由は、むしろ韻文のような制約に縛られない散文へと、その精神が受け継がれたのではなかろうか。マラルメは散文を書くに当たって、高度の自由を獲得したのだと言えよう。このように、危機を経たマラルメは、意識的か否かは別として、このボ

一翻訳の成果を、散文作品へと生かしていくように見受けられる。

そして、「レオン・ディエルクスの詩作品」という短文にも「Ulalume」の名は登場する。さらに、ポーの影響が如実に現われているのが、「Prose」という韻文詩のテーマ設定や語彙、そして、「Notes sur le théâtre」の中に出てくる“with Psyche, my soul”というポーの詩「Ulalume」からの引用などがある。長い詩であるが、ここでも原文とマラルメによるフランス語訳を続けて掲げておこう。

ULALUME

The skies they were ashen and sober;
 The leaves they were crisped and sere —
 The leaves they were withering and sere;
 It was night in the lonesome October
 Of my most immemorial year;
 It was hard by the dim lake of Auber,
 In the misty mid region of Weir —
 It was down by the dank tarn of Auber,
 In the ghoul-haunted woodland of Weir.

Here once, through an alley Titanic,
 Of cypress, I roamed with my Soul —
 Of cypress, with Psyche, my Soul.
 These were days when my heart was volcanic
 As the scoriae rivers that roll —
 As the lavas that restlessly roll
 Their sulphurous currents down Yaanek

Ulalume

Les ciels, ils étaient de cendre et graves ; les feuilles, elles étaient crispées et mornes – les feuilles, elles étaient périsables et mornes. C'était nuit en le solitaire Octobre de ma plus immémoriale année. C'était fort près de l'obscur lac d'Auber, dans la brumeuse moyenne région de Weir – c'était là près de l'humide marais d'Auber, dans le bois hanté par les goules de Weir.

//

//

Ici, une fois, à travers une allée titanique de cyprès, j'errais avec mon âme ; – une allée de cyprès avec Psyché, mon âme. C'était aux jours où mon cœur était volcanique comme les rivières scoriaques qui roulent – comme les laves qui roulent instablement leurs

In the ultimate climes of the pole —
That groan as they roll down Mount Yanek
In the realms of the boreal pole.

sulfureux courants en bas de l'Yanek,
dans les climats extrêmes du pôle – qui
gémissent tandis qu'elles roulent en bas
du mont Yanek dans les régions du pôle
boréal.

//

//

Our talk had been serious and sober, 20
But our thoughts they were palsied and sere —
Our memories were treacherous and sere —
For we knew not the month was October,
And we marked not the night of the year —
(Ah, night of all nights in the year!) 25
We noted not the dim lake of Auber —
(Though once we had journeyed down here) —
Remembered not the dank tarn of Auber,
Nor the ghoul-haunted woodland of Weir.

Notre entretien avait été sérieux et
grave : mais, nos pensées, elles étaient
paralysées et mornes, nos souvenirs
étaient traîtres et mornes – car nous ne
savions pas que le mois était Octobre et
nous ne remarquions pas la nuit de
l'année (ah ! nuit de toutes les nuits de
l'année !) ; nous n'observions pas
l'obscur lac d'Auber, – bien qu'une fois
nous ayons voyagé par là, – nous ne
nous rappelions pas l'humide marais
d'Auber, ni le pays de bois hanté par les
goules de Weir.

//

//

And now, as the night was senescent 30
And star-dials pointed to morn —
As the star-dials hinted of morn —
At the end of our path a liquefient
And nebulous lustre was born,
Out of which a miraculous crescent 35
Arose with a duplicate horn —

Et maintenant, comme la nuit
vieillissait et que le cadran des étoiles
indiquait le matin, – à la fin de notre
sentier un liquide et nébuleux éclat vint
à naître, hors duquel un miraculeux
croissant se leva avec une double corne
– le croissant diamanté d'Astarté

Astarte's bediamonded crescent		distinct avec sa double corne.
Distinct with its duplicate horn.	//	
	//	
And I said — "She is warmer than Dian:		Et je dis : " Elle est plus tiède que
She rolls through an ether of sighs —	40	Diane ; elle roule à travers un éther de
She revels in a region of sighs:		soupirs : elle jubile dans une région de
She has seen that the tears are not dry on		soupirs, – elle a vu que les larmes ne
These cheeks, where the worm never dies,		sont pas sèches sur ces joues où le ver
And has come past the stars of the Lion		ne meurt jamais et elle est venue passé
To point us the path to the skies —	45	les étoiles du Lion pour nous désigner
To the Lethean peace of the skies —		le sentier vers les cieux – vers la
Come up, in despite of the Lion,		léthéenne paix des cieux ; – jusque-là
To shine on us with her bright eyes —		venue en dépit du Lion, pour resplendir
Come up through the lair of the Lion,		sur nous de ses yeux brillants – jusque-
With love in her luminous eyes."	50	là venue à travers l'antre du Lion, avec
		l'amour dansses yeux lumineux.
	//	
	//	
But Psyche, uplifting her finger,		Mais Psyché, éllevant son doigt, dit
Said — "Sadly this star I mistrust —		: " Tristement, de cette étoile je me
Her pallor I strangely mistrust: —		défie, – de sa pâleur, étrangement, je
Oh, hasten! — oh, let us not linger!		me défie. Oh ! hâte-toi ! Oh ! ne nous
Oh, fly! — let us fly! — for we must."	55	attardons pas ! Oh ! fuis – et fuyons, il
In terror she spoke, letting sink her		le faut. " Elle parla dans la terreur,
Wings until they trailed in the dust —		laissant s'abattre ses <u>plumes</u> jusqu'à ce
In agony sobbed, letting sink her		que <u>ses ailes traînassent</u> en la poussière
Plumes till they trailed in the dust —		– jusqu'à ce qu'elles <u>traînèrent</u>
Till they sorrowfully trailed in the dust. 60		tristement dans la poussière.
	//	

//

I replied — "This is nothing but dreaming
 Let us on by this tremulous light!
 Let us bathe in this crystalline light!
 Its Sybilic splendor is beaming
 With Hope and in Beauty to-night: — 65
 See! — it flickers up the sky through the night!
 Ah, we safely may trust to its gleaming,
 And be sure it will lead us aright —

 We safely may trust to a gleaming
 That cannot but guide us aright, 70
 Since it flickers up to Heaven through the night."

Thus I pacified Psyche and kissed her,
 And tempted her out of her gloom —
 And conquered her scruples and gloom;
 And we passed to the end of the vista, 75
 But were stopped by the door of a tomb —
 By the door of a legended tomb;
 And I said — "What is written, sweet sister,
 On the door of this legended tomb?"
 She replied — "Ulalume — Ulalume — 80
 'Tis the vault of thy lost Ulalume!"

Je répliquai : " Ce n'est rien que
 songe : conti-nuons par cette vacillante
 lumière ! baignons-nous dans cette
 cristalline lumière ! Sa splendeur
sibylline rayonne d'espoir et de beauté,
 cette nuit : — vois, elle va, vibrante, au
 haut du ciel à travers la nuit ! Ah !
 nous pouvons, saufs, nous fier à sa
 lueur et être sûrs qu'elle nous conduira
 bien, —nous pouvons, saufs, nous fier à
 une lueur qui ne sait que nous guider à
 bien, puisqu'elle va, vibrante, au haut
 des cieux à travers la nuit. "

//

//

Ainsi je pacifiai Psyché et la baisai,
 et tentai de la ravir à cet
 assombrissement, et vainquis ses
 scrupules et son assombrissement ; et
 nous allâmes à la fin de l'allée, où nous
 fûmes arrêtés par la porte d'une tombe
 ; par la porte, avec sa légende, d'une
 tombe, et je dis : " Qu'y a-t-il d'écrit,
 douce sœur, sur la porte, avec une
 légende, de cette tombe ? " Elle
 répliqua : " Ulalume ! Ulalume ! C'est
 le caveau de ta morte Ulalume ! "

//

//

Then my heart it grew ashen and sober
 As the leaves that were crisped and sere —
 As the leaves that were withering and sere,
 And I cried — "It was surely October 85
 On this very night of last year
 That I journeyed — I journeyed down here —
 That I brought a dread burden down here —
 On this night of all nights in the year,
 Ah, what demon has tempted me here? 90
 Well I know, now, this dim lake of Auber —
 This misty mid region of Weir —
 Well I know, now, this dank tarn of Auber,
 This ghoul-haunted woodland of Weir." ²¹⁾

Alors mon cœur devint de cendre et grave, comme les feuilles qui étaient crispées et mornes, — comme les feuilles qui étaient périssables et mornes, et je m'écriai : " Ce fut sûrement en Octobre, dans cette même nuit de l'année dernière, que je voyageai — je voyageai par ici, — que j'apportai un fardeau redoutable jusqu'ici : — dans cette nuit entre toutes les nuits de l'année, ah ! quel démon m'a tenté vers ces lieux ? Je connais bien, maintenant, cet obscur lac d'Auber — cette brumeuse moyenne région de Weir : je connais bien, maintenant, cet obscur lac d'Auber — cette brumeuse moyenne région de Weir : je connais bien, maintenant, cet humide marais d'Auber, et ces pays de bois hantés par les goules de Weir ! " ²²⁾

翻訳はどのようにして行われているか、この「ユラリューム」の翻訳を具体的にみていくことにしよう。

1. まず、マラルメによる翻訳の大原則である直訳主義が貫かれているということが言える。マラルメの翻訳は、前述のように、自身 « calque(s) » (透き写し) と呼ぶ特殊な手法、即ち、完全な直訳主義に基づいている。その上で、以下の意識的改変を挙げることができる。

2. マラルメ独自の改変が見られる箇所を列挙してみよう。

(1) v.1 ashen 形容詞→ de cendre (maquette では複数になっていた)

前置詞 + 名詞 ——形容詞を、そのまま形容詞で訳すことも可能なのに、わざわざ変えている。

v. 30 was senescent be 動詞 + 形容詞→ vieillissait 自動詞

v.66 it flickers up the sky 動詞→ elle va, vibrante, au haut du ciel 動詞 + 形容詞

v.71 も同じ。

v.78 What is written → Qu'y a-t-il d'écrit

(2) 英語とフランス語の語法の違いから、改変せざるを得ない（恐らく他の訳者でもそうするだろう）箇所もあるが、これはここでは重要ではないだろう。

(3) v.11, 12 Soul → âme もとは Âme と大文字のままだったが、決定稿で改変された。普通名詞にして、一般性をもたせる傾向がある。マラルメの散文には、ほかにも状況性の消去、複数名詞を単数化するなど、同様の傾向が見られる。

v.65 With Hope and in Beauty → d'Espoir et avec Beauté (*La République des Lettres* [以下 RL と略記], *La Renaissance littéraire et artistique* [以下 RLA と略記]) → d'espoir et de beauté (決定稿)

(4) マラルメの意図的改変

v.15~16 that restlessly roll Their sulphurous currents

→ qui roulent instablement leur sulfureux conrant (*RL*)

原文が複数なのに、単数化している。

→ qui roulent instablement leurs sulfureux conrants (決定稿)

ここで原文通り、複数に戻している。

v.29 in the ghoul-haunted woodland of Weir

→ dans le pays de bois hantés par les goules de Weir (*RL, RLA*)

→ dans le bois hanté par les goules de Weir (決定稿)

v.19 realms (王国) → royaumes (王国) (*RL, RLA*) → régions (地方) (決定稿)

v.31 ~32 And star-dials pointed to morn —

As the star-dials hinted to morn —

→ étoiles désignait le matin, —

comme le cadran des étoiles indiquait le matin, — (*RL, RLA*)

→ le cadran des étoiles indiquait le matin, — (決定稿) (前半がすっきりと、

省略され、2行を1行にまとめるという大胆な改変をしているが、これは
繰り返しの放棄の表れと思われる。)

v.37~38 Astarte's bediamonded crescent Distinct with its duplicate horn

→ d'Astarte le croissant diamanté distinct (*RL, RLA*)

→ le croissant diamanté d'Astarte distinct (決定稿) ここで普通のフランス語になった。

v.50 with love → avec l'amour 定冠詞の挿入

v.56 In terror she spoke → Elle parla dans la terreur 状況補語 (副詞句) の後置

v.91 Well I know → Je connais bien 副詞の後置

v.93 同上

(5) フランス語の通常の語順に修正

v.17 the ultimate climes → les climats extrêmes 形容詞の後置

v.19 boreal pole → pôle boréal 同上（なお、この boréal はマラルメの詩篇 Prose の冒頭に出てくる Hyperbole という語の語呂合わせに受け継がれるという説がある。）

v.50 her luminous eyes → ses lumineux yeux (RL, RLA) → ses yeux lumineux (決定稿) 同上

cf. v.62 this tremulous light → cette vacillante lumière ここは英語の語順を踏襲 (形容詞の前置)

v.63 in this crystalline light dans cette cristalline lumière 同上

v.91 this dim lake → cet obscur lac

v.93 this dank tarn → cet obscur lac ここは、マラルメが異なる英語を、同じフランス語で意図的に繰り返していることにも注意。

v.88 a dread burden → un fardeau redoutable

これらのやり方は、マラルメ自身の散文の文体へと受け継がれることになるだろう。

(6) マラルメの作品への影響 (既出のもの以外)

語彙において、多くの反映が見られる

1.35, 37 crescent → croissant (*Ouverture ancienne*)

1.38 duplicate horn → double corne (*Igitur*)

1.59 Plumes till they trailes → ses ailes traînassent (*Ouverture ancienne*)

1.75 vista → allée (*Ouverture ancienne*)

下線部は、冒頭に掲げた「エロディアード古序曲」と共通する語彙である。「古序曲」と「ユラリューム」は、語彙面の共通性だけでなく、構成も prophétique (予兆的)、incantatoire (呪術的) に書かれており、前者が 97 行、後者が 94 行と酷似している点からも、両者の親近性は否めない。

もともと、ポーの詩は繰り返しが多く、全く同じ、或いは類似の単語もしくはフレーズを繰り返し用いることでリズムを作っていく手法がふんだんに用いられるが、とりわけ「ユラリューム」に特徴的なのは、同じ単語で韻を踏むという手法で、これは英語の詩の正則にも反するものだが、ポーはこの禁を冒して、特にこの詩では全編に亘って用いている。まさに音楽性に富んだ詩なのである。

一方、「古序曲」は繰り返しを極端に嫌うフランスの詩なので、そこまで過激なことはしていないが、これほど多くの語彙面での繰り返しは、他の詩篇には見られない独自のものであり、これが遂に世に出なかったという点からも、その実験性がうかがわれる。

この詩篇は 1866 年 4 月のカザリス宛書簡の中では自画自賛され、« *Ouverture musicale* » と称されていた²³⁾。この辺りにも、ポーの詩「ユラリューム」との類縁性を垣間見ることができる。

これを仮に「répétition (繰り返し) の詩学」と名付けておくとすれば、この手法が最も顕著に用いられたテクストに、「イジテュール」が挙げられるることは先に述べた。

若い頃の「ユラリューム」翻訳には、繰り返しの詩学の残滓が見られることも指摘しておこう。

v.31 Et que l'étoile du jour annonçait le matin —

v.32 Et que l'étoile du jour révélait le matin —

*Glanes*²⁴⁾

3. 文体上の影響関係

上述のように、マラルメの翻訳は自身 « calque(s) » と呼ぶ特殊な手法に貫かれている。この言葉の使用を最初に確認できるのは、1864年4月11日付の書簡においてであり、これはまさにポー翻訳に関してであった²⁵⁾。マラルメは、ポーの韻文詩を散文訳することで、自身の散文詩、さらに批評詩を書くきっかけを作っていたのではないだろうか。上で示唆したように、少なくとも批評詩のもつ、余白を駆使した形態は、ポーの翻訳の延長線上にあるように思われる。

マラルメの作品群は、大きく分けて、韻文詩と、散文詩・批評詩の二つに分類することができる。それぞれの到達点が、前者はエロディアード草稿群であり、後者は« Un Coup de Dés »であったと言えよう。« Divagations »は、« Un Coup de Dés »に結実する非韻文を準備するための探究の後を示すものと言ってもいい。これが更に徹底されるのが「書物」の草稿群なのだろうが、結局、マラルメは« Un Coup de Dés »において、詩作における偶然の介入は認めざるを得ないという、或る意味では敗北宣言ともとれる結論に達するのである。ならば、これを逆手にとって、テクストをカード化して、偶然に委ねようというのだろうか。

その一方の核である散文を書くに当たって、ポー翻訳が果たした大きな役割をここでは問題にしたい。

次回以降、以下の手続きで分析を進めていく。

- ①『落穂集』と『ポー詩集』を比べる。
- ②ボードレールの翻訳のある4篇の詩については、ボードレール訳と比べる。
- ③他の『ポー詩集』翻訳から原文と訳文との比較によって、明らかになる問題点を探る。

『落穂集』にはなかった空白の問題。空白を取り入れることで、あたかもそれぞれの段落が Strophe のように見えるマラルメの散文詩は、ベルトラン、ボードレールから着想を借りたものであったかもしれないが、マラルメの場合、ポーの翻訳を介して、これらをさらにラディカルに推し進めたと言えよ

う。すなわち、『Crise de vers』で言っているような、散文の中におけるリズムの問題を意識し、また、ベルトランやボードレールが行わなかった余白にヴァリエーションをつけることで、マラルメ独自の批評詩が形成され、さらに散文のもつ線的性格の克服の極致があの『Un Coup de Dés』だったと推定される。

マラルメが、ポー以外にも英文学に少しばかり親しんだ形跡は、新プレイアード版で、漸くその全貌が明らかになった『英語の美 *Beauté de l'anglais*』に見ることができる。

また文学だけでなく、言語学や、『英単語』、『英作文』に結実するような諺やマザーグース集など、いろんなアングロ・サクソンの文物がマラルメの中に入っている。

これらの探索を以後、順を追って進めていく。

注

- 1) 本論は、2008年月日、岩手大学に於いて開かれた日本フランス語フランス文学会秋季大会にて行なった口頭発表「マラルメのポー翻訳」の原稿を基礎とし、これに加筆、訂正を施したものである。
- 2) 『対訳 ブラウニング詩集』富士川義之編、岩波文庫、2005年、p.10–17.
- 3) SCHERER, Jacques, *Grammaire de Mallarmé*, Nizet, 1977, p.38.
- 4) Lettre à Villiers de L'Isle-Adam du 24 septembre 1867, « j'ai bien peur de commencer... par où notre pauvre et sacré Baudelaire a fini. », in *Correspondance* (以下、*Corr.* と略記), I, Gallimard, 1959, p.259.
- 5) Léon Lemonnier, « Baudelaire, Mallarmé : traducteurs d'Edgar Poe », in *Langues Modernes*, 43, 1949, p.53.
- 6) « Si ma tâche pouvait être continuée avec fruit dans un pays tel que la France, il me resterait à montrer Edgar Poe poète et Edgar Poe critique littéraire. Tout vrai amateur de poésie reconnaîtra que le premier de ces devoirs est presque impossible à remplir, et que ma très-humble et très-dévouée faculté de traducteur ne me permet pas de suppléer aux voluptés absentes du rythme et de la rime », « Avis du traducteur (1864)», in Edgar Allan Poe, *Oeuvres complètes*, traduites

- par Charles Baudelaire, texte établi et annoté par Y.-G. Le Dantec, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1951, p.1063.
- 7) 例えば、SCHERER, Jacques, *op.cit.*, pp.40–43. この種の研究の最も詳細なものは、言うまでもなく、GILL, Austin, « Mallarmé fonctionnaire », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1968, N°.1, pp.2–25, No.2, pp.253–284.
 - 8) 正しい綴りは‘Eulalie’である。
 - 9) SCHERER, Jacques, *op.cit.*, p.26.
 - 10) MALLARMÉ, Stéphane, *Oeuvres complètes* (以下、OCと略記), I, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1998, pp.135–137. 下線部は後にみるポーの詩「ユラリューム」と共通する語彙であり、二重下線部はこの詩の真ん中で反転する部分を指す。
 - 11) *The Works of the Late Edgar Allan Poe* (The Griswold Edition) (1850–1856), volume II: Poems and Miscellanies, NEW YORK: J. S. REDFIELD, CLINTON HALL. 1850.) <http://www.eapoe.org/works/>
 - 12) OC., II, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, pp.735–736. マラルメ訳に付した//は、余白の行を示している。上記全集では一律1行の余白になっているが、マラルメ訳の決定版たる *Les Poèmes d'Edgar Poe*. Traduction de Stéphane MALLARMÉ, avec portrait et fleuron par Edouart MANET, Edmond Deman, 1888, pp.31–35. によれば、一律2行の余白になっており、全集の編集は正確さを欠く。後にマラルメにとって、余白が重要性を帯びてくるのは、広くマラルメ研究者の知るところである。これは後に述べるように、批評詩の形態を先取りしているとも言えよう。尚、便利な対訳本として、以下も参照。*Poèmes d'Edgar Poe*, première édition complète. Traduction nouvelle avec une préface et des notes par Léon Lemonnier, José Corti, 1949, pp.143–145.
 - 13) この点に関しては、以下の論文を参照のこと。CHAUSSERIE-LAPRÉE, Jean-Pierre, « L'Architecture secrète de l' « Ouverture ancienne »», *Europe*, No.564–565, Avril-Mai 1976, pp.74–103.
 - 14) OC., I, pp.15–16.
 - 15) 11) と同じサイト参照。LEMONNIER版、pp.178–181.
 - 16) OC., II, pp.744–746; Deman版、pp.81–86.
 - 17) À Bonaparte Wyse, Avignon, 25 avril 1868, in *Corr*, I, p.272.
 - 18) *Collected Works of Edgar Allan Poe*, VOLUME I, POEMS, Edited by Thomas Ollive Mabbott, Cambridge, London: The Belknap Press of Harvard University Press, 1969, p.456. 11) のサイトも参照。
 - 19) STEINMETZ, Jean-Luc, *Stéphane Mallarmé. L'absolu au jour le jour*, Fayard,

- 1998, p.120. 邦訳：『マラルメ伝—絶対と日々』、柏倉康夫、永倉千夏子、宮寄克裕訳、筑摩書房、2004, p.151.
- 20) MALLARMÉ, Stéphane, *Correspondance complète, 1862–1871*, suivi de Lettres sur la poésie 1872–1898. Édition établie et annotée par Bertrand Marchal, Gallimard, 1995, p.383.
- 21) 11) と同じサイト参照。LEMONNIER 版、pp.183–186.
- 22) *OC.*, II, pp.737–739; Deman 版、pp.45–51.
- 23) *Oorr.*, I, p.207.
- 24) *Oc.*, II, p.791.
- 25) *Corr.*, I, p.113.